# 音に耳を奪われた！

丈徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
音に耳を奪われた！

【Ｎコード】
Ｎ７０１５Ｖ

【作者名】
丈徒

【あらすじ】
ある日、彼は些細なことによって『音を楽しむ会』、略して音楽会の会長に入会させられたのだが、そこはタライや拍子木やサンドバッグで演奏するジャグ・バンドの会だった。そんな彼は、会長に振り回されながらも部活と会を両立していくこととなり、文化祭での発表に全力を尽くして奮闘する話である。

## 笑顔が一番だと彼女は笑った

彼は目の前に存在する、学校ではあり得ないガラクタの山に唖然としていた。山と言っても上に物が乗らないように気を使っているため、この空き教室は足場が点々と存在する、言わばくつろげない空間だ。

彼はこのガラクタの山もといガラクタの大平原を見ながら、嬉々とした表情で中に踏み込んでいったヘッドホンみたいなモフモフを付けた彼女に話しかけた。

「これが全部、お前の言う『楽器』なのか？」

彼の言葉に、彼女は足を止めてこちらを振り向いた。そのとき、彼は遠心力で揺れる彼女の髪に見とれてしまったことに気づいたかはまた別の話だ。

彼女は足元にあった一組の拍子木を手にとり、彼女の可愛らしい口から音が発される。「はい、全部そうです！　例えば、」

「火のよーじん！」

カンッ、カンッ！

彼女は何故か自信満々の笑みで彼を見る。対して、彼はどう反応すればいいのか困ったような表情をした。

数分のような数秒の沈黙に、彼はえっとため息をついた。

「で、それはどう使うんだ？」

そして、また沈黙が訪れた。違いは彼女の顔が自信から疑問に変わっていったことだろう。

「えーっと……開幕に？」

彼女のこの言葉が、後に付くであろう『ミス・ノープラン』というあだ名のキッカケということに、彼女は未来永劫気づかないだろ

う。
彼はそのセリフに、思わずため息をついた。
「……あのな、確かに静めたり注目を集めるには使えるが、繋ぎが難しい……てか、急に話が変わって悪いが、」
彼は教室に転がった楽器と言う称号を彼女に与えられた様々なガラクタに目を向ける。　空のペットボトル、水分の抜けた豆のようなもの、鉄板みたいなものにフライパン、そして使い古しのサンドバッグ。
「とりあえず、体育倉庫なのか畑なのか、それともボクシング部の部室なのかはっきりして欲しいものだ」
「何を言ってるんですか！」
その時、彼女は本日一番の笑顔を見せただろう。彼女のその笑顔に、彼は彼女にまた見とれることになってしまった。
「ここはですね、」
「音を楽しむ教室、略して音楽室です！」
これが、彼と彼女の始まりの日であった。

## 笑顔が一番だと彼女は笑った（後書き）

この演奏方法の正式名称を誰か教えてください。実は昔に聞いたことはあるんですが、忘れてしまいましたｗｗ

次回は遅くても九月中になります。ゆっくりとお待ちください。

## 走ると夢中になれると彼は言った

夏休み、俺は暑さに身を悶えさせながらも、俺はスタートラインでバトンが来るまで待っていた。

部活と言うものは二つの顔を持つ。それは顧問が現場にいるかいないかで変わる。

夏休みと言うものは顧問が毎日のように来るため、手抜きが出来ずに全力でやらざる得なくなる。無論、いなくても全力が普通なのだが、県大会どころか地区で勝てない弱小部にやる気の言葉はない。

つまり、いま中央で罵声と怒声による追い込みを部員にしている顧問さえいなければ、俺は今ごろ柔軟運動をのんびりとやっているはずだ。

と、隣の奴がリードを始めた。リードの早さから見て、恐らく持久走に自信はないのだろう。

俺はそのまま彼を見送り、後ろからやってくるはずの彼が未だにコーナーインしてないことに気づく。コーナーインしてないならまだしも、なぜ直線担当が未だに走っているのか疑問である。

いま行われてる練習はバトンリレーの応用だ。２００ｍのトラックを四人一グループで２０週をこなすのだが、これは少し変わったルールだ。

コーナーインとコーナーアウトにそれぞれ二人が立ち、約５０ｍごとにバトンを交代する方式なのだ。さらに、それだけですら辛いのに、罰ゲームが外周を１時間というある種の地獄絵図のため、皆が必死にならないことはない。

現に、ぶっちぎりのビリグループの俺らも明らかに全力疾走だ。現に、コーナーインで待っていたはずの谷本が死の形相で全力疾走し、俺にバトンと言う名のプレッシャーを届けようと頑張っている。

さすがに9週目でへばっている仲間がいると勝ち目は無いと思うが、まぁやることはやらないと顔向けが出来ない。

俺は肩でリードライン入りのギリギリに立ち、彼が来るのを待つ。1歩、2歩、3歩……彼が砂を蹴る音が近づくごとに、鼓動が早くなっていく。

鼓動がピークに達して彼がほぼ真後ろに来た瞬間、俺は前に軽く走り出して彼のスピードに合わせる。左手を後ろに構えれば、後は信じるだけだ。

そして、手に何かが触れた瞬間、それをしっかりと握って走り出した。その時の足が土を掴む音は、清々しいの一言に尽きるだろう。

「お前ら、二週遅れとはどういうことだ！」「「「「すいません！」」」」

結論を言うと、勝てなかった。

しかし、明らかなるメンバーチョイスのミスがあったのは確かだ。

俺は持久走だからまだいいが、他は短距離走と投げやりとハードルだ。しかも、凄く体力ない奴らの寄せ集めだったから二週遅れは健闘だ。

まぁ、そんなことは言えず、

「水掛！　貴様がいて何故このような結果になる！」

「俺の努力が足りなかったせいです！」

部活だと言うのに、なんでこんな必死に頭を下げているんだろう

か？
「お前ら、今日はもう一日中走ってこい！」
「はい！」「「「……はい」」」
あれ、お前ら元気なくね？
「さっさといけ！」
『はい！』
まぁ、今日も顧問の無茶苦茶に付き合わされるのだった。

「か、身体が……壊死する」「谷本、縁起でもねーこと言うんじゃねえよ。俺なんかそろそろ止まれない身体になるぞ」
「み、水掛（みずかけ）はいいよな、そんなヨユーがあって……水なだけに」
「うまくねーよ……先行くからな」
「いや、俺の方が先に逝くぞ、これ」
「もう黙ってろ」
現時刻１５時４０分、あと２０分もすれば時間的に召集がかかるはずだ。３時間ちょいも走ってると身体が止まらなくなるのだが、明日は筋肉痛で止まっているだろうな。
俺はそう思いながら、ふと砂場にいる女子に目が止まった。
砂場にいる彼女は何かをしていた。校庭の端から端に近い距離のためよく見えないが、砂をいじっているのは確かだ。彼女の横に置いてあるのは、ペットボト……
「おい」　思わず、足を踏み違えて身体のバランスを崩す。体力の欠片すら残ってなかった俺は、受け身などをする力は欠片もない。ズサッ、とグラウンドの土とソールが擦り合う音をあげながら、藍色のジャージに汚く乱れたサンドアートを描いた。
さすがに鬼の顧問も心配そうにこちらに近づいてきた。

「おい、大丈夫か？」
「大丈夫で……」
……非常時だ。いや、一日中走ることすら非常時だが、これはいわゆる非常時の中の非常時。
Ｂａｄ　Ｉｎ　Ｂａｄ．

「……筋肉痛で、立てない、です」
次の瞬間、鬼の顧問はこわばった表情から一気に力を落とし、ため息を吐きつけてきた。それが安堵のため息か、それとも骨折り損だったかは俺には分からないが、とりあえずタバコ臭いのはわかった。
顧問は俺の地面についてた左手を勢いよく持ち上げた。俺は筋肉痛に軽い悲鳴をあげながらどうにか立ち止まる。
しかしなんだろう？　止まっていると凄く不安になってくる。歩きたいような、動きたくないような、変な気分だ。
「ケガは……無さそうだな。払ってやるから動くなよ」
「あ、ありがとうございます」
顧問は軽く腰を低くし、俺の短パンを汚れが露になっている部分を中心にはたいてくれた。しかし、大人の力と言うべきか、はたく音がやけに大きく、さらに痛い。無論、拒否できるわけもなくそのまま叩かれるだけだ。　ある程度、汚れが落ちたところで顧問ははたくのを止めてくれた。
「これで、オッケー！」
次の瞬間、教師の手は俺の背中に真っ赤な紅葉を刻む凶器と化した。

「みんな、注目！」
現在は部室、俺が着替えに勤しんでいる最中、さっきまで命の叫びを上げていた谷本が声を張り上げた。皆は「うっせーんだよ、殺すぞ」とか殺る気満々な殺気をこちらに向けるが、何かに気づいたらしくピタリと殺気を止める。

無論、理由は分かってる。

「みんな、今日は水掛が紅葉を先取りしてきたぞ！　ちっと寂しいから、紅葉大会と行こうじゃないか！」
『よく言った水掛！　綺麗な紅葉を咲かしてやるぜ！』
次の瞬間、皆の痛みと言う名の紅葉は俺の背中に……ではなく、水掛の頬っぺたに炸裂した。
「ちょ、お前ら、ブベラッ！」
「ほら、もういっちょ行くぜ！」
「背中は俺が貰った！」
「じゃあ俺はふくらはぎだ！」
「なら俺は二の腕だ！」
「タンマ、マジタンマ！　お前ら押し倒すんじゃねえよ！　りんかもとい拷問になってるから」

「問答無用！」
「情け無用！」
「人権無用！」
「抵抗無用！」

「ガバッ！」
怒濤の紅葉四連に、谷本は今にも死にそうな表情で俺に口パクをした。

（恨むぞ……）

俺の台詞だろうが。てか、死力を振り絞って言うのがその台詞かよ……

と、紅葉を生み出したグループの一人が俺に話しかけてきた

「そういや、水掛。何で、本気、出さなかった、んだよー」

彼の呼吸が会話を区切ってくるが、この部活では日常茶飯事だ。陸上部だからと言って、誰もが凄い体力を持っているわけではない。

しかし、

「は？」

彼の質問は今の一言に尽きる。俺をどう見たら疲れてないように見えるんだ。

「だって、お前、持久走、だろ？」

「あ、あぁそうだが、関係無くないか？」

「関係、ある！」

彼は勢いよく自分の座っていた背もたれのないベンチを人力紅葉製作器もとい右手で叩いた。が、手のひらが痛むのかすぐに悶え始めた。

……何がしたいんだ、お前。

「だから、お前、全然、疲れて、ねえだろ！」

「……それとかれとは関係」

「なくは、ねーだろ！」

彼は手を勢いよく自分の太ももに叩きつけた。

「持久走選手が、あんなに遅く、走るわけないだろ！」

「……」

反応は、しない。いや、反応できない。

実際、あのリレーは持久力と瞬発力、そしてバトントスの練習だ。俺はその中の一つを使う競技に参加してる。

そして、

「県大会選手が、そんなに遅いわけねーだろ、手を抜いたとしか、

思えねーんだよ！」
　別に俺はホントに速いわけではない。
　スピード云々で問われれば、間違いなく今の一年生に負けるだろう。だが、長距離と言えばそれは自分のステージだ。長距離に対する体力と速度分配などが合わされば結果は言わずと分かる。
　そして、俺は全力の配分を間違えた。
「確かに俺は全力を出していない」
「ほらみろ！　ふざけてんじゃ」
「新里。それはもう終わったことだろ。掘り返してどうすんだよ」
　新里の言葉に、谷本の声が重なる。さっきまで悶えていた谷本だが、いつの間にか制服に着替えて帰る仕度を終えていた。
「だが谷本！　おれは」
「それに、みんな黙っちまったよ。気持ちは分からんことはないが、空気は読めよ」
「……悪い」
　新里はそう言って、既に着替えていた彼はそのままエナメルバックを肩から下げて出ていった。
　と、水掛が急に手を二回叩いた。
「さて、俺らもさっさと帰ろうぜ、ほら水掛も早く着替えろ」
「あ、ああ、悪い」
　俺はそう言って、上半身裸でいたことに気づいた。

　下校時刻１０分前、別に今すぐに帰らなきゃいけない訳じゃないが、学校内アラートによって首から下げているカードが鳴り出して教師たちに翌日、呼び出しと言う名の拷問が始まる。
　と言っても、まだまだ時間があるので、俺と水掛はのんびりと校

庭を歩いていた。
「悪いな、谷本」
「しゃーないさ、足を使う競技でも陸上部全員の足が速い訳じゃない。それに、お前が手を抜いた何て濡れ衣に腹が立っただけだ」
谷本はそう言いながら、わざとらしく眠そうにあくびした。
「それより、明日休みだろ？　そしたら、っと」
谷本は急に足を止め、俺の方を向いたまま遠い目をする。
俺もそちらの方に目を向けると、

先ほどもいた彼女がそこにいた。

「あの子、帰らんで良いのか？」
谷本の言葉に、既に下校時刻へと回ろうとしている。
「俺が呼んでくるよ、谷本は先に校門で待っててくれ」
「え、いや、俺も」
「どうせ筋肉痛がもうきてんだろ、遠慮せずに行けよ」
先ほどから谷本が歩くたびに痛そうな顔をしているのが見て取れる。実際、持久走専門の俺が軽い筋肉痛に襲われているんだ、ないわけがない。
俺が彼女に向かって駆け出したとき、チラッと谷本が手を振っているのが見えた。
俺はそれを見て軽く笑い、そのまま彼女に近づいていった。
一分ほどでたどり着くと、俺は彼女の背中に話しかけた。
「おい、早く帰らないと鳴るぞ」
俺の言葉に、彼女は身体をビクッと跳ね上げ、ゆっくりとこちらを向いた。
「今……何時です？」
俺は軽くため息をつき、ちょっと待ってろと彼女に告げる。
俺は携帯を開き、デジタル文字で表記された時間を見る。

5時57分

「……走るぞ！」

「え、ちょっと魔って！」

俺が彼女の手を引っ張るも、彼女は軽々と俺の手を振りほどいて、回りに散らばっているものを拾い始めた。

「あー、くそ！」

俺は彼女の向かい側に回り込んで足元の物から拾っていく。

スーパーボールにビー玉、ビービー弾がそれぞれ透明袋に詰められているのを、根こそぎ拾い上げる。

「もうないよな？」

「はい、大丈夫です！」

「じゃあ走るぞ！」

校門まで約3分の徒歩道を、彼女の前を切り開くかのように走り出した。

その時、袋に詰められているビー玉同士が走る振動でぶつかり合い、俺と彼女を落ち着かせるかのように音を奏でていた。

## 走ると夢中になれると彼は言った（後書き）

意外にも早く書き下ろしました。
なぜだろう、音楽パートが思い付かないのに筆が進む。

**ある意味それは才能だ、と彼は思った**

「で、お前は女の子と仲良くダッシュして、無事に校門にゴールイン、か」

肩で息をする俺らに、谷本は呆れ果てたような、全く無関心のような目をこちらに向けてきた。

なんだその目は、と内心で噛み締めながら、俺を赤いランプで照らす校門の壁に設置された登下校認証機の液晶に手の甲で触れる。

「下校受付を開始いたします。生徒や職員の方ならマスターカードを認証機にかざして下さい」

今のは液晶に付いたスピーカーに記憶させられた女性の声だ。無論、毎度のこと聴いてるので聞き流しながら俺は認証機にマスターカードを首から下げたまま、物を持った手を使わずにかざす。こんなのは慣れっこで、すぐにかざすことが出来た。 すると、ピッという音と同時に校門に付いていた赤いランプが青いランプへと切り替わる。俺はそのまま既に開いていた校門から出る。

校門から外に出てから後ろを振り向くと、彼女も俺の後をスグに追ってきた。

「セーフっと。ありがとうな、君」

「……は？」

外見とは正反対な彼女のスゲー男口調に、俺は思わず悲鳴のような声を上げる。隣にいた谷本は俺とは違い、何故か口を押さえながら笑いを堪えていた。

「それにしても、君は我の心配せずとも良かったのに、すまないことをしたな。申し訳ない」

だめだ、俺も笑いが込み上げてきた。所々に散りばめられた飴細工のようなスゲー男口調、もとい武士みたいな口調は俺のツボにく

るものがある。　と、谷本がさすがに怪しまれると思ったのか、笑いを堪えながら彼女のスピーチに混ざっていく。
「と、ところで、きみ、みの名前は？」
惜しい、なんか挙動不審なやつに見えんぞ。しかもどもるのが文の先頭じゃないとこが拍車を駆けて怪しい。
が、彼女はあまり不審がってないのか、普通に返してくれた。
「我は栗林（くりばやし）ケート、無論学生だ」

もう笑うしかなかった。
俺と谷本は盛大に吹き出す。校門前で１８時の太陽に照らされながら、腹を抱えて笑う俺らを、彼女もといケートさんは何がおかしいと言わんばかりに俺らを睨む。
「何がおかしいんだ！」
前言撤回、普通に言った。
「だ、だって、我なんて今時、いわないだろ、なぁ水掛」
谷本は涙を目に貯めながら俺に話を振ってきた。気持ちが分からんことはないが、さすがに笑いすぎだろう。
俺は笑いたい気持ちを押し殺し、谷本に答える。
「確かに、我なんて最近は小説ぐらいでしか見ないだろうな」
人の口から聞くのはネタや、厨二路線まっしぐらの奴から「我は神の加護を受けし者なり」とか、とうてい日常会話には出てくるわけがない。
つまり我と言う単語は中々の死語だと言っても過言でもない。
「つまり、我が我と言うのが可笑しいと？」
「言葉を並べんじゃねえよ。漢字しかり英語しかり、代名詞という偉大な物があるであろうが」
すると、彼女はそこで頭を抱えた。恐らく、上手い代名詞を出せないのであろう。
一方、俺と谷本はどんな台詞が飛び出すのか期待しているが、正

直もうこれ以上は来ないと俺は予測している。だが、谷本は何かに自信があるのかのように、彼女から見えないように背中に回した左手の指を3本立てた。
恐らく、1レート百円の軽い賭けだろう。俺は仕方なく、右腕を背中に回して右手でＯＫの形を作る。その合図に、谷本はＯＫを返してきた。
と、俺らの期待に答えるように、彼女が口を開いた。

「つまり、我の三人称がおかしいのか？」

……普通に言葉を間違えやがった。谷本も驚きだったらしく、表情が一切動いていない。
と、予測不能の生命体はまた混沌の台詞を読み上げた。
「なんですか？　我は変なことでも言いましたか？」
ここまで来たら笑うしかない、とでも言わんばかりに谷本は笑いだしてしまった。一方、俺はこれをある種の才能と思いながら、とりあえず事態の収拾の案を考える。
よし、無難に帰ることを提案しよう。
「えーと……そうそうケートさん！　あなたは電車通学ですよね？」
と、急な質問に彼女は戸惑いを見せる。
「え、まぁ我はそうですが……」
ここの我で谷本が肩を震わせて笑いを堪えていたのはこの場で俺と谷本の秘密だ。
「ならさ、俺達と一緒に帰らないか？　てかな、立ち止まっていると時間が勿体ない」
俺は本音をさらりと漏らし、谷本に振り向く。
すぐに笑い止んだ谷本は考えもせずに即答した。
「だな、帰れるならさっさと帰ろうぜ。ケートさんもいいよな？」
谷本の支線が、俺の支線が、ケートさんに注がれる。
ケートさんも少しだけ戸惑ったが、

「はい！　我は大丈夫です！」
気持ちの良い、そしてまた笑いを誘う返事をしてくれた。

未だ夕日に照らされる今、モノレールの真下を歩く俺らは無言だった。
理由はさっきの会話だ。あそこで話題消化をし過ぎたため、現在は明朝の静けさもとい沈黙状態だ。
こういうときのためのムードメーカー谷本も、さっきは誤爆のオンパレードだったためか黙り込んでいる。
なにか面白いネタを、そうだな……

「ケートさんってなんか男っぽい名前だよね」

一瞬、自分が自爆テロを起こしたような気がした。
そして、
「それは、我は顔も名前も男と言いたいのか？」
それは彼女の隠し持っていた火薬に引火した……もとい、自分から墓穴を掘りやがった。
こういうときの頼れる谷本だが、今は笑い死ぬんじゃないかと思うくらい口を押さえて涙を目に溜めている。それを歩きながら行っているのだから、中々シュールな絵面だ。
いや、とりあえず弁解が最初だ。
「違う違う、ケートって名前はケイトから来てるんだろ？　最後がトで終わる女子は珍しいと思ってさ」
「ああ、そういうことか」
ケートの男口調に、谷本はまたも盛大に笑い出すのを必死に堪え

る。さすがにそこまで笑うのは礼儀知らずではないのだろうか？
と、ケートさんはそんな谷本を気にせずに話を続けてくれた。
「ホントは毛糸って名前になるはずだったんですが、女子である我の名前に毛って文字は可哀想、と母が言ったのでカタカナなんです」
「……へぇー」
なんとも、少し複雑な話だな。
「ところで、我はお二人の名前をまだ知らんのだが……」

次の瞬間、俺は雷に撃たれた。もとい、ド忘れしていた。
俺は谷本にアイコンタクトを飛ばす。先に紹介しろ、と試しに飛ばしてみる。
と、谷本は何かを理解したかのように目を瞑り、足を止める。俺とケートも足を止めると、彼はゆっくりとと口を開いた。

それは、波無き声。

『Ｉ　ｃａｎ』

そして、彼は目を見開きこう言うのだった。

「ｆｌｙ！」

「もう黙ってろ」
俺は谷本の顔面に裏拳を決め、ケートに向き直る。
ケートは理解しがたい、と言った表情をするが……
「意味分からん」
前言破棄、理解すらしようとされませんでした。
「悪い悪い、俺は谷本幸一（みずたにこういち）、谷本はそのままでさちにかずと書いて幸一だ。で、そっちのバカが谷本幸次（たにもとこうじ）、幸の次で幸次って言う」
「ブッ！」

そこで彼女は盛大な放屁を……ではなく、口から盛大に吹き出して口を押さえる。
だが、彼女の小声が何を考えているのかを伝えてくれた。
「幸一と幸次が高校生……フフッ」
もう黙れよ、と言いたい気持ちを俺は抑える。
くだらない親父ギャグにも勝るこの静けさは、まるで回転を終えた洗濯機のような静けさが漂う。
その静けさが駅まで続いたとは言うまでもなかった。

「へー、お二人は高校生からの仲なのか」
新種の我っ子の彼女はなんとも事不思議そうに俺らを眺める。その言葉に「まぁな」とどこか自慢げに谷本は言葉を返す。
現在、俺らはモノレールのホームで壁に背中を預け、ケートさんは大きなバックを床に置いて俺が持っていた荷物を押し込んでいる。
モノレール、と聞けば死ぬほど高い乗り物に思えられるが、花隣島は地上を無駄なく使うために地上線路廃止を推進しているため、モノレールの需要が高くなっている。
そのため、モノレール自体は線路型と同じ値段である。まぁ、これはアメリカ合衆国と日本列島のピザ経済を参考にすると面白い、とか言っていた同学年からの受け売りだ。
と、「そうだそうだ」と谷本は預けていた背中を起こし、俺とケートさんの前に移動する。何事ですか、とか言わんばかりにケートは目を丸くする。
「どうしたんだ？」
前言解体、男口調でした。
と、谷本は「フフフ」と言わんばかりに無邪気な笑み、まるでガチャガチャでお目当てを引き当てたような笑顔を見せる。

「ケートさん、今日出会えたのも何かの縁だと思って、明日は一緒に遊びにいきませんか？」
「はひっ？」
なんとも間抜けな声が、ホームにいる皆からの視線を集める。ケートさんは顔を真っ赤に染めようとするが、すぐに皆は視線をそらしていく。
そんなことはいつものことだ、とでも言ってしまいそうな勢いで谷本は話を続ける。
「明日からお盆じゃん？　それで細道たちと……って分からないか。2組のバカトリオとその他数人で町巡りをするんだよ。女子も二人ぐらい来るからなじみやす」
「くねーだろ、あの二人は絶対に彼氏にスライムよろしくベタベタするだろ」
単に茶々を入れただけに見えるが、実際にあり得る話だ。
と、さすがの谷本も反論を唱える。
「あの二人は意外に空気を読むぞ。『他人の補助』イコール『点数プラス』とか本能が告げるだろうな」
「それは……」
ケートさんは何とも言えない表情をする。まぁ、自分が馴染めないことを前提で話されてしまってるのだからしょうがないだろう。
「まぁ、二人が空気読まなくても俺らが相手するから安心せい。な、水掛？」
「まぁな」
不器用に俺が答えると、ホームに女性のアナウンスが響き渡る。
『各駅停車左循環線、ただいま参ります。ガードからの顔出しにご注意してください』
「予想より早いな」
そう答えたのはケートさんだった。相変わらずの男口調に俺と谷本は苦笑いをこぼす。声が高い分、余計に苦笑いが込み上げてくる。

と、俺がゲートの前へと移動するが、二人は一向に動かない。
「なんだ、二人とも横断線か？」
特急線と言われるとモノレールのためかパッとしないかもしれない。
簡単に言うと、ここと真反対の駅にしか止まらないモノレールだ。各駅のモノレールとは別に線を引いており、円形の島を有効に生かして島自体の中央を横断する形をしている。
花隣島自体は綺麗に整地された島なので、それを一望できる横断線は『一度は乗りたい区間ｖｅｒモノレール』の中で３位だったらしい。まぁ、モノレール自体は未だに普及してないので微妙な数字である。
と、ケートさんは俺の言葉に生き生きと返事をする。
「我はそうですが、こう……幸次さんも横断線なんですか？」
少しどもる彼女に、幸次は「まぁな」と返す。
「じゃあ、」　そこで彼女は携帯を取り出す。

「メアド交換をしましょう！」

一瞬、沈黙が俺らの前を漂う。
（なに、この合コンみたいなノリ……）
半ば呆れながらも、俺は携帯を取り出すが、
「悪いな、俺は電池切れてるんだ。お二人でやってくれ」
谷本はそう呟くと、空を仰ぎ見る。
「じゃあ水掛さんに送るから、後で幸次さんのと一緒にメールください」
「りょーかい」
手慣れた手つきでケートさんは携帯を開き、俺の携帯に重ねる。
俺の携帯は相手の信号をキャッチしてから送受信の確認が出るため、事前操作は特にない。少しして、「データ受信しますか？」と画面に表示されたので迷わず「はい」を押す。

それと同時か、それとも少し前なのか、音もなく到着したモノレールのゲートが開く。
「じゃあな」
「おう、また明日」
「行く気になりましたら返事するからな！」
俺は二人の言葉に背中を押されながら、モノレールへと乗り込む。そして、モノレールのドアの窓越しに二人の姿を見ると自然と言葉が沸き上がる。

（お似合いの二人だな）

端から見れば、まるで付き合っているようにしか見えない二人に見送られながら、モノレールは動き出す。モノレールの窓は住宅区を抜けると景色が一変する。

窓に写りこむのは、街の灯りがイルミネーションのように見える綺麗な景色だ。だが、昼間だとここは日本列島と花隣島にサンドウイッチされた太平洋が写り込む。
その風景は外国人が風刺として写真と共に掲載したことがある。タイトルは『島に汚染されていく海』。
世界で様々な形で人工島計画が進むなか、最近で異論を唱える者はこの写真を掲げるらしい。無論、水産業に影響は出ないと結果、そして花隣島から出港する漁船は収入の何割かを千葉自体に提供という形をしているらしい。

「と、」
思いっきり忘れていた。
俺は携帯を取り出し、明日に集まること間違いなしのバカトリオに『参加者が増えるかも』とメールを打ち込む。
それから送信ボタンを押すと、数分後に一人からメールが返って

くる。他はそいつがやってくれると思っているので来るわけがない。
メールを確認すると、違和感を少し覚える内容だった。
『さっき谷本からメール来たよ。明日の詳細は後で送るからな』
（骨折り損、か）
なんか忘れている気がしたが、時に気にせずに俺は空に目を向ける。
空は彼の携帯の待ち受け画面と同じ、青黒い世界が広がっており、そこには既に朝を迎えた世界が広がっていた。

## 彼は大人の余裕を知らしめられる

「確かに寝てた俺が悪いかも知るない。だが、」
現在、俺らはトラックの荷台に居座っていた。荷台と言っても、屋根も壁もしっかりとした運送業者の乗ってるようなものだ。まぁ、実際にダンボールなどに入った運送物と共に運送されているわけだ。
俺たちは、島中央の商業エリアである小立の店とかが立ち並ぶ、いわゆるショッピングセンターに向かっている。島中央は近々にモノレールが開通する予定なのだが、今は車や徒歩でしかなく、横断線も上空を通るだけで素通りだけだ。
そして、運良く細道の知り合いに運送業者のお偉いさんがおり、配達ついでに乗せてくれたのだが、

「何で俺の背中にダンボール載せてんの……」

重量級のダンボールが俺の背中にのっているのだが、そんな俺は冷たいシートに頬を押し付けながら雑魚寝をしている。皆を見れば、女性陣はともかくヘアピンを付けた男子がダンボールの山に背中を預けながら女性陣の雑談に混ざっている。
俺はまじそいつにターゲットを向ける。
「鈴蘭（すずらん）、お前だけ楽してないか？」
俺がそう訪ねると、ヘアピン少年こと鈴蘭は両手に持った何かを持ち上げる。
一見すると紙袋を不器用に丸めたような物だが、鈴蘭は上げるときに酷く歪んだ顔をする。
「幸一、これは一見は軽そうに見えるだろう。だが、」
鈴蘭はそう言いながら紙袋に張られた一枚の紙を見つめる。
「宅配物は重さと大きさで区分があってな、区分での評価が高いど

ちらかを選ぶんだ。しかし、これはこの小ささに対して基準値が６に設定されている。つまり、」

「この荷物は３０キロだ」

一瞬、身体から血の気が引いていく音がした。

「君が助手席か。細道が座ると思っていたが、まぁ話し相手にはちょうどいいか」

彼はそう言いながら手元の配達ルートを見る。こればっかりはアナログらしく、細かい時間や再配送の可能性が高い家などがマーキングされている。

と、俺は灰皿にタバコが捨てられているのに目が止まる。しかし、彼のトラックはバリバリのマニュアル運転でタバコを吸う暇などないに等しいだろう。まぁ、その点においては運送業者のテクニックというものだろう。

と、吸い殻がやけに長いことが目に止まる。

「禁煙でもしているんですか」

俺がそうたずねると、彼はギアチェンジを軽くしながら答える。

「自分を苦しめたいって思ったことはないか？」

一瞬、このドライバーはド変態に見えたが、どうもそんな面はしていない。

そんな彼は俺に構わずに言葉を繋げる。

「勉強のような実る我慢ではない、ただ単に自分を苦しめて満足する、そんな気分だ」

「……分からなくはないです」

現に、俺もそんな気分なときがある。シャーペンを肌に押し付けたり首をしめてみたりと、度は低くても少なからず経験はある。
俺が少し思い更けると、彼はなんとも不満な顔をしながら赤信号で止まる。

「それは……ダメだ」

ハッキリと貫くようなその声音は、俺の中の何かにぶち当たる。痛く、痒く、もどかしく、吐きそうになる感覚。
「これはキミの歳で知るようなモノではない」
「……聞いといてそれですか」
「聞いたからこそ、だ」
彼の言葉の一言ごとが俺の肺や腕、心臓に突き刺さる。
彼はアクセルを踏み込み、ギアを軽く動かす。
「知るべきもんじゃない。だが、知らない方が良いとは言わない」
「どっちですか」
「どっちもだ」
彼は胸ポケットからタバコを取り出し、灰皿にそのまま押してつける。勿体無いとは思うが、それは彼が自我を保つ一つの方法なんだろうと理解する。
「まだ若いんだ。しかも青春の盛りの高校生だろ？　そんな小さな後悔なんて捨てちまえよ」
彼は、俺の何を知っていると言うのだろうか？
俺は俺で俺なりに俺のためではなく俺の思いのために俺の理想のために俺が願うことのために俺を痛めることを選んだのだ。
それを小さな後悔だなんて、
「……何がわかるんだ」
言葉は溢れだし、汚物のように流れ出る。こうなれば、止まらない。
「何を知った風に、何を存じたように、何を分かった感じに浸って

やがるんだ。俺は俺なりに選んで」

「選ぶ？　私を笑わせるなよ、少年」

その大人は、なんとも嘲るような表情で道路を見つめる。

「選ぶことが出来ることがどれだけ幸せか考えてみろよ。選ばされた身がどんな気か考えてみろよ。正論に甘えるな、偽善を見紛うなよ」

そんな彼の目は、酷く汚かった。汚れたなんて最上級の誉め言葉と言わんばかりに、その瞳は視界に存在しない暗闇を映し出す。

「オセロで完璧な黒が存在せぬように、完璧な白は存在しない。キミは自分の入れた甘いコーヒーにひと摘まみの塩を入れたことを忘れている」

「そんなことは」

「あるさ。『完璧は主観を変えれば瓦解する』、有名な言葉さ」

「……」

やはり、生きる大人とは何かが違う。しかし、それだからこそ偽善に思えてしまえる。

「あなたは背中で語る口ですか」

「はは、細道にも言われたな。背中に口が付いてるって」

彼はそう漏らすと、胸ポケットからまたタバコを取り出す。と、今度は押し付けずに俺の目の前に持ってきた。

「話を戻そう。このタバコはタール値が1ミリの奴だ。お値段は年齢制限がなくなってから千円ぐらいだがな」

彼はそうぼやくと、またも灰皿に押しつける。

「少ないタール値のタバコを半月の間にカートン……つまり１０個パックを山ほど買い漁り、毎日2箱以上を吸いきるほど吸うんだ」

二箱というと、記憶が正しければ４０本のタバコを毎日吸っていると言うことになる。タバコの燃焼時間が3分として、2時間もタバコをくわえていることになる。そんだけ吸えば、全て1ミリのニ

コチンも中々の蓄積量となる。
「そして半月後、プッツリとタバコをやめるんだ。すると、ニコチン切れの身体が悲鳴をあげるんだ。最初は身体の悲鳴を俺は初めて感じたね」
「なんでそんな無駄なことを」
「苦しみたいと純粋に思うからさ。マゾヒストと呼ばれるが、そういう気分でもない」
彼はそういうと、駐車場に入り込む。もうそんなに時間が経ったのか、と少し呆れる。
「キミ、名前は何て言うんだ？」
「え、幸次と言います」
「コウジくんか」
彼はそう言うと、ギアを変えて駐車を始める。
「じゃあ一つ、ためになる一言を……」

「諦めろ」

その言葉は、なんとも酷く、醜く、醜悪で、なんの感情も込められていない。しかし、俺はその言葉に一つの何かを感じ取る。

「さて、到着だ」

「ヤッホー！」
短く髪を切り揃えた少年はショッピングセンターに向けてそんなことをするが、彼の横に立つ女性に白い目をされたのを気にしていた。
「ショウワちゃん、そう冷たい目をしないでくれよ」
そのショウワと呼ばれる女性は２０台中場といったところだろう

か。彼女の長めな髪が風になびく。
「和彰、私はこんなに人が来るとは聞いてないんだが？」
彼女の台詞はごもっともであるだろう。
周りを見渡すと、運転手含めた男性が7人、女性が4人と中々の半団体ぶりの数だ。
と、運転手の人がちょっと待ったと言わんばかりに口を挟む。
「ショウワさん、俺は宅配がまだなんで参加はしないよ」
「だとしても、だ」
ショウワがそうごねると、和彰は何を勘違いしたのか埋めた地雷を掘り起こす。
「さてはショウワ、俺と二人がよかったのか？」
一瞬にして寒気と生暖かい目線のオンパレードになったのは気のせいだと思いたい。だが、そんなことよりももっと重要であることが起こった。
ショウワさんが頬を染めたのだ。
「そ、そんなわけがないだろ！」
そしてどもる。これはもう怪しまないわけにはいかないだろう。
和彰はそんな彼女を軽くなだめながら、どっかへ向かっていく。オンパレードが一転、俺らは子を見る母のような視線へと移り変わる。
と、場違いの女王が口を開く。
「細道さん、私も一緒にいた」
「鈴蘭、俺らもさっさと行こうぜ。ちょっとグローブを買いに行きたい」
「オーケーだ本物、さっさと行くか」
そう言って二人はショッピングセンターに向かっていくと、場違いの女王も彼らの後を追いかけていく。
「で、残ったのは俺らか」

呆れた様子で生徒会役員の少年はため息を吐く。
「まぁそう言うなよ、涼。残りたくて残った訳じゃねえんだよ」
谷本はそう吐き捨てると、残りを見渡す。
いつの間にかドライバーがいないが、彼も仕事中なのだから仕方ない。
「残りは俺と幸一と、バカップルとケートさんか」
「バカップルとはなんだ、バカップルとは」
谷本の発言になんとも不満そうな顔をした生徒会役員こと涼は汚名返上と言わんばかりに声を張り上げる。
「だいたい、普通のカップルというのはだな」
「涼」
そこで、バカップルの片割れである少女がやっと口を開く。
「どうでもいいが、フードコートに行かないか？」
「薫先輩に賛成！」
声を張り上げたのは谷本だった。そんな彼に俺とケートさんは冷たい視線を送るが、肝心の涼は高笑いを漏らしていた。
バカップルの片割れ、もとい薫先輩も呆れたように言葉を返す。
「みんなで行くとするか」
そう言って先陣を切ってくれた薫先輩に、俺らはただ着いていくだけだった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7015v/

---

音に耳を奪われた！

2011年11月17日03時30分発行